

道徳教育とケアの倫理

朝倉輝一

要約

本稿では、道徳教育におけるケアの倫理の在り方を検討する。教育学者ノディングズのケアの倫理は、関わり合いの中での受容性や相互性を重視する。一方、クーゼは看護倫理の立場から、ケア一元論ではなく、患者にとっての最善と社会的正義を同時に追求できる選好功利主義を対置する。特に道徳判断力形成にとっては、二者択一的なモラルジレンマよりも、医療倫理にみられるようなケーススタディをモデルとしたモラルジレンマ解決のための対話が必要である。

キーワード：関わり合い、選好功利主義、対話的普遍性、モラルジレンマ資料と医療倫理ケーススタディ

1982年に発表されたキャロル・ギリガン (Carol Gilligan) 『もうひとつの声 (In a Different Voice)』¹ の登場とその後続くギリガン-コールバーグ論争以来、正義とケアの倫理の対比が盛んに行なわれてきた。この論争の核心には、人格の尊厳の問題を本人の自律概念からのみならず、ケアと責任概念からも再構築することが含まれているがゆえに、多方面に影響を与えてきた。教育の分野に直接関わるわけではないが、『バイオエシックス百科事典』の編者で「ケア」² の項目の執筆者でもあるライクは、ケア概念の思想史を概観する中で、気遣い、共感、歓待 (受容) の意味でのケアが再確認されているとまとめている。

ギリガン以外で注目されるケアの倫理としては、哲学のミルトン・メイヤロフ (Milton Mayerlof) 『ケアの本質 (On Caring)』³、教育学のネル・ノディングズ (Nel Noddings) 『ケアリング 倫理と道徳の教育——女性の観点から』⁴、看護学のヘルガ・クーゼ『ケアリング 看護婦・女性・倫理』⁵、さらにフェミニスト倫理学のスーザン・シャーウィン『もう患者でいるのはよそう』⁶ などが挙げられよう。この中で、ギリガン以降でケア (ケアリング) の倫理の概念を整理し体系性を追求しているという点では、ノディングズを嚆矢とするとみて間違いなであろう。しかも、彼女のケア論は教育におけるケアを念頭においている点が重要である。一方、クーゼは選好功利主義の立場からノディングズのケア理解に反論を試みている点で注目に値する。そこでまず、ケアの倫理が注目されるきっかけとなったギリガンの『もうひとつの声』とギリガン-コールバーグ論争を振り返り、その後ノディングズ、クーゼのケア理解を比較検討し、道徳教育の観点からケアの倫理の可能について論じることとする (本稿ではケアとケアリングをあえて区別せず、「ケア」という表記で一貫させることとする)。

1. ケアの倫理概観

ギリガン-コールバーグ論争の意義

ギリガン-コールバーグ論争は『もうひとつの声』の登場によって劇的に始まった。なぜなら、道徳性の発達段階において一般に女性が男性よりも発達段階が低く位置づけられるのは、コー

ルバーク理論には男性的な道德意識の発達を以って「人間」の道德性の発達とみなすという暗黙の前提があるからだ、ギリガンが喝破したからである。そして、彼女は「誰もが他人から応えてもらえ、誰も傷つけられてはならない」ことを重視する「ケアと責任 (care and responsibility) の倫理 (学)」を「公平さ」中心の正義の倫理 (学) に対置した。こうした批判に対してコールバークは道德意識の発達理論の立場から、正義と他者の福祉へのケアという二つのアスペクトはどちらも「各人の尊厳への等しい尊敬」という義務論的なアプローチの枠内で統合できると答えた⁷。

この論争は、歴史上繰り返されてきた論争が現代にふさわしい仕方ですべて蘇っているともしえる。すなわち、カントに対するヘーゲルの批判、義務倫理学と徳の倫理学との論争、(ハーバーマスの言葉を借りれば) 倫理学における近・現代的アプローチと古代・中世的アプローチとの論争などである。ギリガンが道德判断の価値評価における内容から形式を分離することに異を唱えたのと全く同じ様に、マッキンタイアは道德法則の純粋な形式だけからはいかなる実質的な道德原理も演繹できないことを論じている⁸。またギリガンが妊娠中絶のような最も個人的なジレンマでさえ公正・正義という形式的権利として主張するような男性の道德の言語に関して女性の被験者達が当惑感を抱いていると報告しているのと同じ様に、サンデルは人間関係を手続きの・法的モデルにのみ基づかせる政治は「負荷なき自我 (unencumbered selves)」を基礎としており人間に固有な連帯と同一性への洞察を欠くと批判する⁹。さらに、道德判断に関するコールバークの発達モデルでは、一般に女性の判断は自他に関する感受性のゆえに普遍性の観点に立ちにくいと論じられることにギリガンが異を唱えたのと全く同じ様に、テイラーやウォルツァーらは正義についての道德判断の形式を善き生の文化的構想の内容から切り離すべきだという立場を疑問視している¹⁰。

議論の中心となっているのは、何らかの助けを必要としている人の福祉への利他主義的配慮に特別な地位を認める立場、つまり、無事息災や具体的な善なのである。さらに、「ケア」は伝統的に女性特有の性質とされてきたわけだが、それゆえに軽く扱われたり、逆に、普通の人間には及びもつかない崇高な仕事とされてしまわないように、ケアの概念やケアの仕組みを個人レベル・社会レベルで構築する複眼的思考が求められていることも踏まえる必要がある。

ケア概念史概観

一般的にケアの概念を論じる場合、ノディングズが「愛すべき小さな本」(Noddings, p. 9, 14頁) と呼ぶミルトン・メイヤロフの『ケアの本質』がケアの概念を本格的に取り上げた最初の本であると紹介されるのが通例のようである¹¹。ところが、『バイオエシックス百科事典』(以下 EoB, p. と略)¹² によれば、この概念は古代ギリシャまで遡る概念であり、今日一般に理解されているより広い意味を有していた。

CURA 神話

そもそもケア (care) はラテン語の「CURA」に由来する。この語は、一方で「ある人が心配事に苦しめられる (burden with cares)」という際の心配 (worries)、不安 (anxieties) を意味し、他方で「他者の幸せを準備する (providing for the welfare of another)」というような、気遣いの良心 (solicitude) ないし献身 (devotion) のような積極的な意味をもつ (EoB, p.319)。また、ハイデガーの『存在と時間』第6章でヘルダーの詩「憂いの子」が取り上げられているように、古代ギリシャ・ローマ時代には CURA 神話があった¹³。この神話には、人間は誕生以前にも、生きている間にも、そして死後においてさえ何者かによって気遣

われているという人間観が示されている。したがって、CURAには人間を大事に育てながら人間を全体として結び合わせるという役割や、世俗的・身体的な要素と天上へと上昇する努力という精神的要素が読み取れる。こうしてみると、このCURA神話は対立しあう個人間の闘争を人間社会の出発点（自然状態）として強調する近代的契約社会論の神話を覆す内容を提出しているとみることができる。というのも、自分が他者から気遣われている（be cared for）という人間の存在理解に関わるからである。現代心理学によれば、この神話で伝えられるように誕生時から気遣われている人は自己と他者を気遣うという養育的な力を発達させるという（EoB, p.320）。

魂の気遣いとしてのケア——ソクラテス

古代ギリシャの哲学者ソクラテスは、自分自身を魂の医者ないし魂の癒し手とみなしていた。ソクラテスの「魂の気遣い」とは「魂をできる限り善くあるように気遣うこと」であり、彼にとって魂とは道徳的自覚と実行の主体としての「自分自身」を指す。従って、魂を善くあるように気遣うことは、魂が自分自身を知って本来の善さにあるようにするという自覚的実践のうちで初めて可能となる。旧約聖書¹⁴や新約聖書¹⁵にもケアと呼べるものが登場する。例えば、「隣人とは誰か」という問いに対してキリストが答えたという「善きサマリア人」の喩え話¹⁶もケアに属する。

気遣いのケアと配慮的ケア——ハイデガー

現代哲学の代表者ハイデガーが展開したケアの概念について、少々立ち入ってみておこう。Sorge（関心《ケア》）、Fürsorge（待遇《気遣いのケア》）、Besorgen（配慮《配慮的ケア》）¹⁷ という概念は、彼の哲学体系の核心部に位置する概念である（本稿では、ハイデガーの区別を尊重しつつ用語の問題上一貫してSorgeをケア、Fürsorgeを気遣いのケア、Besorgen 配慮的ケアとする）。彼の哲学の出発点であり、また彼の生涯にわたる関心事は存在の意味に関する哲学的問いであった。彼は現存在という語を被投性と投企を繰り返す世界内存在としての人間の経験という意味で使い、現存在たる我々がケア（Sorge:関心）であること、つまりケアこそが人間「であること」だと主張する。ここには、他者を手段としてのみならず目的としても遇するというカント以来の理念が生きている。

ケアに関する彼の注目すべき洞察は、気遣いのケアの両極に位置する二つの形態についてである。一方は相手からいわば苦勞を取り除くという意味で、他者の「中に飛び込み（einspringen）」、他者の肩代わりをするケアである。その場合、ケアの対象たる他者はケアの関係の中で支配され依存させられているため、他者は用具的存在となり、このケアは事物に対する「配慮的ケア」になってしまう。これとは対照的に、気遣いのケアとは、他者の可能性を予測して他者の「前に飛び出す（率先する:vorausspringen）」ケアである。それはケアの対象から苦勞を取り除くのではなく、「本当の意味で配慮すべきこととしてあらためてその人に返還する」¹⁸ ケアである。これこそが気遣いのケアである。なぜなら、このようなケアの中で他者が自己自身を知ることを助け、そのことによってその他者が自由になるからである。

ライフサイクルにおけるケア——エリクソン

発達心理学者エリクソンは、人間の生涯を8段階からなるライフサイクル論を唱えた。それによれば、各段階が発達の危機であると同時に、次の段階への起点となってそれぞれ「徳（活力:virtue）」が生じるのだが、ケアが問題となるのは成人期（adulthood）に相当する第7段

階である¹⁹。この段階での発達上の危機は「生産性・世代性 (generativity)」対「自己陶醉 (self-absorption)」・「停滞感 (stagnation)」である。これは「自分の生み出したものをはぐくみ育てること」「より若い世代や他者を教え、導くこと」対「自己の関心や欲求へのとらわれ、没入」「生産性のなさ・停滞感」の対立である。この段階における危機から生まれる心理的様態である徳が「存在を生むこと」と「ケア」なのである。エリクソンにとってケアとは、「愛、必要、偶然によって生まれたものに具体的に関わること」であり、「人、物、観念を世話することに広く関わることである。」²⁰

エリクソンの心理学の枠組みは、二つの対立しあう力のせめぎ合いによって生じる発達と変化の過程に依拠する弁証法的なダイナミズムである。第7段階に関して言えば、成人の積極的なアスペクト (生産性) と消極的なアスペクト (自己陶醉) との相互作用がその後の人生にいかに大きな影響を及ぼし続けるかという点にある。個人の成長とケアの強さは、こうした相互作用を通して社会的慣行や制度を含む環境を変えるよう要求する積極的な適応によって生まれる。このように、メイヤロフ以前にもケアに関する研究の歴史が存在するのである。

2. ノディングズのケア理解

ギリガンの研究を「女性的見解 (feminine view)」からさらに展開し、ケアという行為を倫理学として体系化し既存の正義の倫理にとって代えようとしたのがノディングズ『ケアリング 倫理と道徳の教育——女性の観点から』である。だがその一方で、ノディングズを評価しつつも、そのケア理解の一面性を批判し、ケアと正義の両立を提唱するのがクーゼである。クーゼは、ノディングズとメインタイトルが同名の『ケアリング 看護婦・女性・倫理』で、ノディングズのいうケアには賛成だが、看護行為をケア一元論として理解して、そのまま看護や医療に持ち込むケアの看護倫理には反対している。クーゼによれば、ケア論やケアの倫理の主張のうち、従来の道徳理論を抽象化として批判する姿勢がケアの倫理それ自体にも当てはまること、また、個別特殊な要求を満足させることの優先性もケアの倫理に特有というわけではない。(クーゼは、看護師が末期患者にも主導的な立場で積極的に関わるべきだと主張するが、同時に安楽死を容認する議論を展開してもいるので批判も多いと思われる。しかし、クーゼのノディングズ批判はケア理解にとって重大な論点が含まれていると考えられるので、本稿ではクーゼのノディングズ批判の部分だけを扱うことにする。)

「法と正義」対「応答性・関係性・相互性」

ノディングズによれば、普遍的な道徳規則や義務を定める従来の倫理学は、各々が特殊な人間関係の中にある人間の現実にそぐわない。むしろ、相互の関わり合いの中で各々特殊性を持つ個人の要求に応じていく「ケア」こそ、人間本来のあり方である。

「ケアの女性的倫理 (feminine ethics of care)」を定式化しようと試みるノディングズは、男性の倫理としての「法と正義」と、女性の倫理としての「感受性、関係性、応答性」との間に明確な区別を設ける。「女性的見解」とは、「情感のこもった反応」、すなわち受容、係わり合い、敏感な反応を道徳的基盤とする見方のことである。

ギリガンがケアの倫理の推論のユニークな形式を強調するのに対し、ノディングズは、ケア提供者とケア受容者との間に起こる相互性を強調し、メイヤロフを念頭に置いて、実践的活動としてのケアに焦点を当てる。ノディングズは、「普遍化可能性 (universalizability)」や「原理にもとづく倫理」を否定するだけでなく、ロールズのような「契約 (contract)」論者の「契約」や古代ギリシャ的な「思慮」も退ける。そして、「相互性 (助け合い reciprocity)」こ

そ展開されるべき倫理学であり、「人間の情感のこもった反応 (human affective response)」(Noddings, p.3;4頁) が倫理的行動の源泉だと主張する。

専心没頭と動機の転移

こうした観点に立って、ノディングズはケアの特徴を専心没頭 (engrossment) と動機の転移 (motivational displacement) に見る。何よりも重視されるのは、「自分の人格を投げ入れる能力」としての「共感 (sympathy)」ではなく、「自分自身の中に他の人を受け入れ、その人と共に見たり感じたりする」受容する能力である。これが「専心没頭 (engrossment)」(p.30; 46頁) である。それは、ケアを行なう人格が「他の人の現実性 (reality) を理解し、できるだけ入念にその人が感じるままを感じ取ること」(Noddings, p.16, 25頁) という受容性に富む状態をさす。「動機の転移」とは、「私を動機づける活力が他の人に注ぎ込まれる」ときに生じるものである (Noddings, pp.33-34, 51頁)。ケアは専心没頭のような心的な受動的な作用 (mental suffering) の一状態、すなわち何かや誰かに対する心配や怖れや気遣いといった「負荷された心的状態」なのである (Noddings, p.7, 13~14頁)。

ノディングズはケアを求める人をその人の置かれた関係の外部から分析するのではなく、当事者の主観性からとらえようとするので、受容的態度を何よりも重んじる。なぜなら、ケアは、「他のひとが必要としていると感じられるものへの、偽りのない応答に根ざしているかによって、正しかったり、間違ったりする」(Noddings, p.53, 84頁) 同心円的・連鎖的關係をもつからである。これが専心没頭を重視する理由である。したがって、観察し評価する分析的態度に対しては重きを置かない。

自然的ケアと倫理的ケア

さらに、ケアは「自然的ケア」と「倫理的ケア」からなる。「自然的ケア」は、子供に対する母親の振舞い方に見られるような自然な傾向から生じる他者への応答を指す。これを支えるのは、何がよいかについてのひとつの洞察を導く「ケアの記憶、やさしさの記憶」(Noddings, p.100, 154頁) である。もちろん、われわれは否定的な記憶も持っているし、感情的な葛藤も抱える。そのとき、「自然的ケア」の心情を思い起こすことでケアを維持することができる。それが「倫理的ケア」である。ケアそのものは傷つきやすく、維持する努力を必要とするので、ケアを維持する努力を導く「倫理的ケア」が必要なのである。

注意しなければならないのは、「自然的ケア」と「倫理的ケア」に優劣はないが、後者は前者から生じるという点である。他方で、ノディングズは倫理的行動の源泉は、「人々が互いに感じあう共感」と「ケアや思い遣りの機会を維持し、回復し、強めようとする切なる願い」(Noddings, p.104, 162頁) という二つの心情であるとも主張している。この心情は自然的ケアと倫理的ケアに対応しており、二つの心情の等根源性を示唆しているとも受け取れる。だが、倫理的ケアは自然的ケアに依存しているとも述べているわけだから、一貫性については疑問が残る。

さらに、普遍的ケアすなわち万人へのケアを拒否する点にも注意が必要だ (Noddings, p. 86, 135頁)。専心没頭も動機づけの転移も考えられないような状況、すなわち他人の中で完結する可能性がないという状況ならケアの責務がないという立場は、ケア理解の限界が容易に見て取れる点である。

受容性と応答性

ケアの倫理では、受容的態度が何よりも強調される。その際、道徳的理想として、「現実の自己と、ケアし、ケアされる人としての理想的な自己の全体像との間の能動的な関係」として「倫理的自己」がとらえられている (Noddings, p.49, 78頁)。その点で、ノディングズはケアのダイナミズムをとらえている。ケアに参加しているとは、ケアする人の意識がケアされる人に向けられ、適切に関わっているというだけでなく、ケアされる人もケアを受け入れ、適切な応答を返しているということである。それは、ケアする人とされる人の双方が互いに結び付くだけでなく、各々の反応を通じて各人が自己自身に結び付けられることを意味している。受容性と応答性は対をなしており、それが関係性と呼ばれるのである。

しかし、ヘルガ・クーゼは『ケアリング：看護婦・女性・倫理』で、こうしたノディングズのケア理解は一面的だと批判する。

3. クーゼのノディングズ批判

クーゼのケア理解

クーゼは、「患者の自律性を尊重し、患者自身の視点に立って患者の利益や福利を最大化すること」を目的とする選好功利主義の立場に立つ。そして、患者アドボカシーという観点から、尊厳のある個人としての患者に向き合うケアの意義を積極的に認める。だが同時に、価値観の多様化した社会の中で個人を尊重しかつ万人の福利をも促進しなければならないことも強調する。

ケアそれ自体への評価とノディングズ批判

クーゼによれば、ノディングズの理解するケア理解では、ケアの概念は空虚であるばかりか恣意的で気まぐれである (Kuhse, p.160, 194~196頁)。ノディングズがケアの倫理の基礎を情感のこもった自然的ケアに置くことはすでに確認しておいた。だが、嫉妬や憎しみなども自然的な反応である。なぜ多様で自然な反応からある特定の部分だけを取り出すのか、ノディングズはその正当化を行っていない。その原因の一端は、過剰に規則に縛られることと、一切の原則を拒むことを混同したことから生じている。それゆえに、かえってケアの理想を他者と一体化するような状態に高く設定してしまうことになってしまったのである。普遍的な規則や原則をすべて拒否し、一貫性を失えば、恣意的という批判が生じるのは当然であろう。しかし、クーゼはケアそれ自体は積極的に支持する。それはなぜか。

気質を備えたケア

クーゼは、ノディングズの「情感的 - 受容的な様態」が「他者の健康に関わる現実をありのままに理解し受け止めようとする意欲」という意味でのケアをよくとらえていると評価する。看護における「受容性と感受性 (反応する能力)」こそ、クーゼが強調するケアの核心部分だからである。クーゼはこのようなケアを「気質をそなえたケア (dispositional care)」 (Kuhse, p.150, 190頁) と呼ぶ。

このケアにおいては、「患者は単に機能不全に陥った有機体としてではなく、特定のかけがえのない他者として、つまり固有のニーズ、信念、望み、欲求をもった個人として認識される」ので、「他者を受け入れようとする意欲と個別性に対する傾注」が含まれる (Kuhse, p.151, 191-192頁)。なぜ受容性と感受性が必要なのかといえば、「自分で選んだ倫理的アプローチから導き出される原則や価値や目的を追求しようとしても、『気質をそなえたケア』がなければ

個々の状況において何が私たちに求められているかに『気づく』ことさえできない（Kuhse, p.152, 192頁）からである。だから、患者によいケアを提供するためにはケアは必要条件なのである。

ケアと正義の二分法を超える道徳理論の要請

だが、「気質をそなえたケア」だけでは倫理にならない。ノディングズにとっては、ケアが倫理の基礎であり、そのまま善なので、行為の正邪がケアに対する忠実さで測られてしまう。だが、「すべてのケアが本質的に善である」と言い切れる根拠は不明なままなのである。したがって、「私（たち）にとって善」であるものが善であるという独断になりかねない。こうしたケア一辺倒の立場に対しては、クーゼだけではなく、フェミニズムの立場から対話的普遍主義を掲げてケアと正義の両立を探求しているベンハビブも、社会的に成功した兄と不遇な弟の関係およびその家族がマフィアの場合を挙げて疑問を呈している²¹。この例が適切かどうかはともかくとして、私もこの批判を支持する。なぜなら、近代の複雑な社会における生活形態にふさわしい道徳理論は、不偏不党性という普遍主義的な内容も必要としているので、道徳的判断にもっと統一したアプローチを行えばケアと正義を分断する二分法を超えることができると考えるからである。

ノディングズの抽象化批判の問題点

さらに、クーゼは、ケア論やケアの倫理の主張のうち、普遍的道徳理論への抽象化批判はケアの倫理それ自体にも当てはまること、また、個別特殊な要求を満足させることの優先性もケアの倫理に特有というわけではないことを指摘する。

まず、ケアの倫理からの抽象性批判を検討しよう。ノディングズのようなケアの倫理観は「文脈や人間関係、個別的な他者に対するケアや責任に敏感であること」を強調するあまり、抽象化は眼の前のかけがえのない「この人」を見えなくしてしまうとみなす。だが、正義であれケアであれ、文脈、関係、個人のなかのどの要素に着目し、どの要素を背景に置くのか、なぜそれが倫理的に重要なのか明確にできなければならない。どの倫理学の立場でも何らかの抽象化は必要なのである。したがって、抽象化することそれ自体が問題なのではなく、何を抽象するのか（あるいは何を捨象するのか）が重要なのだ（Kuhse, p.121, 152頁）。「文脈に敏感であること」もまたひとつの原則ではあるのだから、それ自体ひとつの倫理的実践の指針である。現代では「善き生」は多様なのだから、ケアの倫理自体、どの原則や要素が「善き生」の中心になるのかの現われのひとつでしかないのである。

「当事者の満足」はケアの倫理に特有なのか

また、結果として当事者が満足するというのなら、「善を最大化せよ」という功利主義の倫理があると、クーゼは指摘する。関係者の個別性や文脈を重視し、他者への反応や具体的な他者の観点に立つことも功利主義と変わらない。功利主義的な観点でも、「行為の正しさはもっぱらその結果で決まるのであり、そして当然ながら、ある行為の帰結は個々の状況によって異なる文脈しだいで変わってくる」（Kuhse, p.124, 156頁）。だから、ケアのみを強調するのなら、功利主義で充分対応できる、というわけである。しかも、道徳規則や原則が衝突しても、最終的にただひとつの基本原則に照らして解決するという点も同じである。

だが、単にケアしなさいと命じるだけでは倫理にならないし、看護実践の指針とはならない。なぜなら、患者の生理学的・代謝上のニーズを注意深く配慮し対応するという意味のケアが、

患者を尊厳ある個人として余すところなく遇しているという意味でのケアと一致しているのかを測る基準が問題だからである。「『どのような場合にいかなる理由で』というこの問いには、ケアの価値や目的を明らかにし、道徳的根拠からその価値や目的を正当化することでしか答えることができない」(Kuhese, p.159, 201頁)。

社会制度や正当化を視野に入れたケア理解の可能性

ノディングズのケア理解では、ケアをする人とケアされるこの人という特定の関係に集中するので、限界がなくなる。また、制度や規則の不備がある場合、その場限りで規則をかいくぐる対応はできても、その不備を指摘し変える視点を欠く。さらに、病院などに勤める看護師の場合、様々な患者に対して時間とエネルギーの配分を考えなければならない。こうした問題点を解決するためには、一貫性のある公平な理由によって自らの行為を正当化できなければならない。

しかも、看護師が一人ひとりの患者をケアするとしても、そのケア自身も社会制度上の文脈に支えられており、看護師も自分たちが作ったわけではない制度上の規則や原則に従わなければならない。患者に対するケアが道徳的に見て適切であることを保証するためには、自分の道徳的洞察とその根拠を誰もが納得できる普遍的で理解可能な言語で語ることができなければならない。それなくしては患者の代弁者であることも、自分自身の正当な要求を正当化することもできない。このように、クーゼはケアだけではなく、公正さすなわち正義も必要であることを説くのである。

クーゼのノディングズ批判のまとめ

ここまでクーゼのノディングズ批判を概観してきた。ケアが受容性と敏感な反応、あるいは関係者の個別性や文脈を重視し、具体的な他者の観点に立って反応するという意味が確認され、評価されている。だがそれは同時に、功利主義の観点でもある、というのがクーゼの指摘である。むしろ、功利主義はそれだけにとどまらず、公平さという観点ももつので、社会性が確保できると同時に、ケア当事者の「倫理的自己」のダイナミズムも正当化できる、とクーゼはみなす。確かに、ノディングズの「ケアの倫理」理論は、医療倫理や臨床上の倫理的ジレンマの解決のために構想されているわけではないので、そのままでは臨床倫理には当てはめるには限界がある。また、クーゼの批判によってノディングズのケア理解の抱える一面性も理解できる。

4. 道徳教育とケアの倫理

以上、ノディングズによって深められたケア概念とクーゼによって指摘されたノディングズのケア理解の限界を概観してきた。では、これらを視野に入れて道徳(倫理)教育を考える場合、ケアの倫理はどのような貢献ができるだろうか。

ノディングズ『ケアリング』における道徳教育論

ノディングズは『ケアリング』最終章で、自らの道徳教育論を展開している。彼女によれば、我々はすべて他の人の倫理的な完成に対して責任を負うと同時に、道徳教育は共同体全体が取り組むべき企てである(Noddings, p.171, 264頁)。そして教育の目標とは、自他へのケアを維持し、高めるというだけでなく、目標それ自体が過程の一部であるという関係にある。しかも、これはケアする人の目標と同じである(Noddings, p.172, 265頁)。従って、生存や幸福の保証は第一義的な位置付けをされない。なぜなら、幸福や完全性が生じてくる源泉としての

「ケアにおける相互的な関係性」こそが人間の基本的な現実性 (reality) であって、単なる生存のための生活や快の充足や完全性は副次的なものにすぎないからである (Noddings, pp. 173-174, 268頁)。もちろん、教育を知性の訓練と道徳性の訓練に分けることもできる。しかし、人間がこれら諸領域にみられる性質の統合的な構成体 (integral composite) であることを鑑みれば、教育の目標はケアの維持と向上でなければならない。こうした観点に立って、ノディングズは倫理的な理想を育む手段として対話 (dialogue)、練習 (practice)、奨励 (confirmation) を挙げる。

対話・練習・奨励

ノディングズは、個別具体的で身体を持った存在としての「その人」への関わりに必要不可欠な「対話」を強調する。理想から言えば、「学校とは、価値や信念や見解が批判的に、かつ評価を与えながら吟味できる舞台」である (Noddings, p.184, 283頁)。しかし、これまでは、生徒が抽象化・客観化や孤立化にさらされてきた。なぜなら、知的な課題の達成・成果やその評価が最優先課題とされてきたからである。抽象化や客観化は他人との違いを強調し、生徒を孤立化に追い込む。このような男性原理にとって代わるべきなのが、連続性や相互依存性を核とする女性原理なのである (Noddings, pp.182-183, 282頁)。

次に、取り上げられる「練習」とは、ケアする現実的能力を磨くことを主眼に置く活動である。ノディングズは、職業体験や日本の学校教育でも取り入れられているインターンシップのような例を挙げてその有効性を説く。それゆえ、生徒が職業体験をすることでケアする力を身につける準備活動に関わることを期待するのである。

「奨励」とはケアされる人の中にケアの理想を確認し、さらに力づけることを指す。ケアされる人が現実性と調和する、可能な限り最も優れた動機を抱くとき、その人の現在の行為の中であらわになるイメージよりもさらに素晴らしい、その人自身にとって到達可能なイメージを示すことである (Noddings, p.193, 297頁)。ケアされる者としての生徒が主体として遇されるための、ケアするものとしての教師の振る舞いのことである。

教育システムの中でのケアの倫理

以上がノディングズの挙げるケアの倫理の理想を育むための手段である。しかし、同時に教育は社会の諸システムの一環として運営されている点も見逃すことはできない。ノディングズもこの点には気づいており、「評価」に関する葛藤を取り上げている。すなわち、一方は社会に対する責務とも関わる「客観性」としての生徒評価であり、他方は生徒と教師の協働の中で行われる「主観的」な評価である (Noddings, pp.195-196, 301頁)。彼女はこの葛藤の解消として、ケアの倫理的理想を育む教育のあり方として「脱専門化 (deprofessionalizing)」を提案する。それには「管理的な」技能や「訓練的な」技能や階層的な組織に対して同心円的・連鎖的関係の導入が含まれるが具体的な展開はみられない。この問題は、別の機会に論じることにする。

二者択一的「モラルジレンマ」からケーススタディとしての「モラルジレンマ」へ

近年わが国でも道徳判断力の実践的形成のためにコールバーグ理論に基づく「モラルジレンマ資料」を使った道徳の授業が行われている²²。しかし、本来コールバーグのモラルジレンマは個人の道徳性の発達段階の判定のために開発された資料であって、クラスの中で討論するために開発されたものではない。しかも、この授業方法では二者択一を迫るため同じ結論でも個々

の生徒によってその推論過程が異なることを無視している、状況設定があいまいであるなど、様々な問題点が指摘されている²³。しかも、状況設定のあいまいさや二者択一を迫ることは、生徒にとってリアリティが希薄なため、責任ある判断が下せないことを意味する。その意味では、医療倫理におけるケーススタディのように、現実の社会の中で出会いうるモラルジレンマを設定し、社会的に要請される道徳規範を最大限尊重しながら個別具体的な「最善」を検討することが求められる。その際、これまで見てきたケアの倫理の立場は着目されてよい。対話性を重視して個別具体的な対応を検討するからである。

原則一元論を超えて

ノディングズのケアの倫理であれ、クーゼの選考功利主義であれ、あるいは本稿では主題的に取り上げることができなかった正義（公平）の倫理であれ、「傷つきやすい人格の尊厳への等しい尊敬」を暗黙の前提にしている点では同じである。また、一元論的な発想という点も同じである。確かに、ケアの倫理が指摘するように、道徳的主体の過度な抽象化は、身体を備えた生身の自己の相互性や傷つきやすさを周縁に追いやってきた。同時に、「善き生」の多様化は、普遍主義に対話的であることを要求する。ケアには、統一した物語的な (narrative) 仕方アイデンティティをもつ主体の概念が含まれる。傷つきやすい人格を尊重するケアと、普遍性をもつ道徳的規範概念を擁護する道徳教育の架橋の可能性は対話性にある。これを今後追求していく必要がある。

注

- 1 Gilligan, Carol, *In A Different Voice*. Cambridge, Harvard University Press, 1982. 岩男寿美子監訳『もう一つの声』川島書店、1986年。参照：森村修『ケアの倫理』大修館書店、2000年。
- 2 Reich, Warren T.(Editor in Chief), "Care", in *Encyclopedia of Bioethics, Revised Edition, Vol. 1*. New York, Macmillan Library Reference, 1995, p.319 ~ 344. この一連の流れを概観し、討議倫理学の観点からケアと正義の問題を論じたものとして拙著『討議倫理学の意義と可能性』法政大学出版局、2004年。
- 3 Meyaroff, Milton, *On Caring*, New York: Harper & Row, 1971. 田村真也訳『ケアの本質』ゆみ出版、1993年。
- 4 Noddings, Nel, *Caring: A Feminine Approach to Ethics and Moral Education*. California, University of California Press, 1984. 立山善康他訳『ケア 倫理と道徳の教育——女性の観点から』晃洋書房、1997年。以下本文中に (Noddings,p., 頁) と略記。
- 5 Kuhse, Helga, *Caring : Nurses, Women and Ethics*. Oxford, Blackwell, 1977. 竹内徹・村上弥生訳『ケア看護婦・女性・倫理』メディカ出版、2000年。以下本文中に (Kuhse,p., 頁) と略記。
- 6 Sherwin, Susan, *No Longer Patient : Feminist Ethics and Health care*, Temple University Press, 1992 . 岡田雅勝他訳『もう患者でいるのはよそう—フェミニスト倫理とヘルスケア—』劉草書房、1998年。
- 7 Kohlberg, L. & Levine, C. & Hwer, A., *Moral Stages: A Current Formulation and a Response to Critics*, Harper & Row, 1984.; ローレンス・コールバーグ、チャールズ・レヴァイン、アレクサンダー・ヒューアー、片瀬一男他訳『道徳性の発達段階・コールバーグ理論をめぐる論争への回答』、新曜社、1992年。また次を参照。L. Kohlberg, 'Stage and Sequence: The Cognnitive-Developmental Approach to Socialization' in *Handbook of Socialization Theory and Research*, Ed. David A. Goslin, Rand McNally and Co., Chicago, 1969. 永野重史監訳『道徳性の形成』、新曜社、1987年。

- 8 MacIntyre, *After Virtue*, pp. 44-46. 篠崎榮訳『美徳なき時代』、みすず書房、1993年、45-48頁。
- 9 Sandel, M., *liberalism and the Limits of Justice*, Cambridge, 1982, p. x iv. 菊池理男訳『自由主義と正義の限界』、三嶺社、1992年、「序論」x iv。また「日本語版への序文」iii頁。
- 10 'Die Motive einer Verfahrensethik', in *Moralität und Sittlichkeit*, ed. Wolfgang Kuhlmann, Suhrkamp, Frankfurt. a. M., 1986, S.194-217.; Waltzer, M., *Intepretation and Social Criticism*, Cambridge, MA: Harverd University Press, 1987. 大川正彦他訳『解釈としての社会批判』、風行社、1996年。
- 11 例えば、前掲森村修『ケアの倫理』。また、武山重光「ケアの倫理」、加藤尚武・加茂直樹編『生命倫理学を学ぶ人のために』所収、世界思想社、1998年。
- 12 *Encyclopedia of Bioethics:revised edition* Vol.1, Editor in Chief: Warren Thomas Reich, Macmillan Library Reference, New York, 1995, 以下 (EoB,p.) と本文中に略記
- 13 CURA 神話に関しては、EoB の care の項目、あるいはハイデガーの『存在と時間』第6章 (SuZ, S. 198, 415-416頁) に載せられているヘルダーの詩を参照。
- 14 「私は……見回したが、私に心をとめる者は一人もありません。私には避け所がなく、私をかえりみる人はありません。…… (主よ) どうか我が叫びにみこころをとめてください。私ははなはだしく低くされています。私を責める者から助け出してください。」(旧約聖書、詩篇142. 4-6)
- 15 イエスは弟子達に生活の必要に関する心配するのではなく、自分たちの必要を知っている父なる神によって氣遣われていることを信頼するよう語った。「明日のことを思いわずらうな。明日のことは、あす自身が思いわずらうであろう。一日の苦勞は、その日一日だけで十分である。」(マタイの福音書、6. 25-34)
- 16 この喩え話の内容は以下の如くである。「隣人を愛せ」と説くイエスに律法学者が「隣人とは誰のことか」と問うた。そこで、イエスは、強盗に襲われた人を祭司やレビ人が見て見ぬ振りをして通り過ぎたのに対し、サマリア人が傷の手当てをしたばかりか宿屋まで連れて行き、自費で宿屋の主人に世話を頼むという話をする。その後、イエスが件の律法学者に「誰が強盗に襲われた人の隣人になったのか」と問い、律法学者が「その人に慈悲深い行いをした人です」と答えたというもの。(ルカによる福音書、10. 25-37)
- 17 『存在と時間』では、現存在の存在としての Sorge (関心) のうち、対人的交渉の側面を Fürsorge (待遇)、広い意味での事物に関わる交渉の側面を Besorgen (配慮) としている。『存在と時間』第4章第26節参照 (S.117-126)。訳語は細谷貞雄訳 (筑摩学芸文庫版) による。また、この訳本には各頁上段に原文の頁数が示されているので翻訳頁は略する。
- 18 SuZ, S.122.
- 19 CF.E.H.Erikson: *Chldhood and Society* 2d ed., rev. New York: W.W. Norton, 1963, pp.266-268, 仁科弥生訳『幼児期と社会』みすず書房、1977-1980年、350-352頁。; *Insight and Responsibility*, New York: W. W. Norton, 1964. 鎌幹八郎訳『洞察と責任』誠信書房、1971年。
- 20 op.cit.p.267. 前掲『幼児期と社会』、351頁。
- 21 Benhabib, Seyla, *The Debate over Women and Moral Theory Revisited*, in ed. by Johanna Meehan, *Feminists Read Habermas: Gendering the Subject of Discourse*, New York and London, Routledge, 1995, pp.185-204.
- 22 荒木紀幸編著『モラルジレンマ資料と授業展開 中学校編』明治図書、1990年。
- 23 広瀬信「道徳教育の方法」、井ノ口淳三編『道徳教育』学文社、2007年、10-110頁所収。コールバーグ流の道徳授業論に関する批判としては以下を参照。井上治郎「資料即生活論とその展開」現代道徳教育研究会編『道徳教育の授業理論』明治図書、1981年。

Moral Education and the Ethics of Care

Koichi ASAKURA

Abstract

This paper examines the value of the ethics of the care about moral education. The important features of It is important for Noddings's ethics of care are receptivity and reciprocity and their relationship in relatedness. On the other hand, from the position of nursing ethics, Kuhse criticizes Noddings's care-monism, and counterposes preference - utilitarianism which can pursue the best for the patient and social justice simultaneously instead. Based criticism of Kuhse's care- monism, I examine the ethics of care in moral education. The formation of moral judgement needs the dialogue of those who faces moral dilemma rather than the monologue at alternative selection. Especially I would like to show that case study which is seen by medical ethics is helpful in moral education too.